

建物を楽しむために

【建物を見るコツ】

古い建物を見るだけで楽しいものです。旅先や、いつもの街並みの中で良い建物を見つけた時は、まるで大切なたからものを手に入れたような気分になります。

建物を楽しむ手段はひとそれぞれですが、あえてガイドラインを紹介するのなら、まずは建物の周りの状況を眺めてみてください。なぜそこにその建物がたっているのかを、道路や街並みをヒントに探ってみましょう。

それから、建物をじっと見つめて、建物に漂っている雰囲気をじっくり感じてみましょう。もし上手いかない時は、ディテール(細部)を目で追いかけてみてください。なんとなく感じていた雰囲気は、色味が理由かもしれませんし、細部に施された装飾が原因かもしれません。

雰囲気を味わえるようになったら、建物のたどってきた物語へ想像の翼を広げてみましょう。年代や様式、デザイン、構造の種類などの知識があれば、より鮮明に想像することができます。所有者やガイドボランティアから話を聞くことも役に立つでしょう。

建物を理解するうちに、その建物を大好きになっていけば、あなたはもう立派な建築マニアです。

【まちのシンボル】

実は、数ある文化財建造物のすべてが、まちのシンボルとしての性質を備えています。逆にいえば、定まったかたちがないのが面白さといえるかもしれません。

ただ、シンボルとなり得る建物の背景には、必ずといっていいほど、そこに関わった人々のドラマがあります。例えばそれは、外観の特徴的なかたちに、それを選んだ人々の思いが詰まっていたり、あるいは取り壊しの危機に瀕した建物を残すため、がむしゃらに努力した人々のエピソードが秘められていることもあります。

そういったドラマを、残された資料や関係者から伺えれば、建物の存在をより感動的に味わうことができるでしょう。

【建築マニアの嗜み】

建物はそれを使用し管理する所有者がいて、はじめて姿を保つことができます。見学する際には建物へのいたわりの心を持って、大切に扱いましょ。また、中には見学のできない建物もあります。そういった場合は無理をしないこと。じっくり機会を待てばいつか見ることができ、その日を信じて無茶をしないことも、建築マニアの嗜みなのです。

和風のシンボル

日本建築史の中で、まちのシンボルとなり得る

大きな建物に転用できるデザインを過去から見出そうとした時、
城郭の天守に行き着いたのは必然だったのかも知れない。



photo: Hitoshi Kumamoto

ホテルの鳥瞰。丘陵に沿った建物に城郭風の屋根ののる外観が木製の手すりと調和している

蒲郡クラシックホテル本館(旧蒲郡ホテル本館)

風光明媚な観光名所にそびえる、城郭風の名物ホテル

天守閣のあるホテル

二つの半島に囲われた三河湾の東部に位置する蒲郡市は、温暖な気候と湾に浮かぶ竹島が人気の観光地です。

その竹島を望む絶好のロケーションにあるのが蒲郡クラシックホテルで、丘陵にそびえる姿はまるで城郭を連想させます。実際に、外観を特徴づける望楼は名古屋城の天守を模したもので「天守閣」と名付けられました。

名物ホテルができるまで

蒲郡ホテルを建設した瀧信四郎は、尾張藩の呉服商瀧家の五代目当主で、明治45年に風光明媚なこの地に料亭旅館の常磐館を開業し



名古屋城天守を模した「天守閣」

ました。やがて現在の名鉄蒲郡線が開通する昭和4年ごろには、常磐館を含む一帯が観光地として人気を博します。

ちょうどその頃、外国人観光客の誘致を目的として鉄道省に国際観光局が新設され、大蔵省からはホテルの新設費が融資されることになり、その幹旋を受けて蒲郡ホテルが誕生しました。

また観光局からの要望で、ホテルの外観には和風の意匠が求められ、千鳥破風や唐破風が重層し望楼ののった特徴的な姿となりました。



ロビー内観。木調の内装が美しい

蒲郡ホテルは戦前のホテルブームの先駆けとして全国に名を知られ、建築家のブルーノ・タウトをはじめ多くの著名人が訪れました。

ディテールの巧みさ

蒲郡ホテルを訪れて感じるのが、いわゆる言い難い品格の良さです。建物は外観の印象よりもコンパクトにまとまっていて、和風のデザインが所を得て巧みに収まっています。

それらを引き締めているのが木造のディテールで、屋根の軒下の垂木や、窓周りに配された手すり、入口で客を迎える車寄せの木組みや天井などが、鉄筋コンクリート造の建物に違和感なく組み込まれています。

また丘陵の高低差を利用したフロア計画も見事で、正面入り口のある1階と客室のある2階、地下階の宴会場はそれぞれ和風の庭園に開かれていて、スムーズに外部空間と接続されています。

蒲郡のシンボル

車寄せの真鍮製の扉をくぐると、木調のロビーが広がり、吹き抜け天井の漆喰細工やレトロなエレベーター、立派なマントルピースに迎えられて、上等なしつらえに胸が高まります。



地階松の間のテラス。タイルに注目

1932年(昭和9年)
鉄筋コンクリート造4階建て小屋組は鉄骨造。屋根は木造
「設計」久野節「実設計」村瀬國之助
蒲郡市竹島町15-1
<https://gamagori-classic-hotel.com>

国宝 犬山城天守

日本建築のベスト・オブ・シンボル



天守外観。大壁の漆喰の白、下見板の黒、石垣の橙色の配色が美しい

最古の天守

日本建築の中でも、まちのシンボルとして最も親しまれてきた建物はお城の天守でしょう。幾重にも重なった屋根に立派なシャチホコ、どっしり構えた天守の姿は、まちの中でもひととき目を引く存在です。

現在、全国各地には天守を備えたお城が100近くあり、そのうち近世に建設された天守は12城現存しています。

その中でも犬山城は、直下に迫る木曽川のダイナミックなロケーションや城下町からの眺めの良さ、そして何より天守の美しいたたず



望楼外観。棟には約1.2mのシャチホコがのる

まいから、指折りの名城に数えられます。

城下町のメインストリートである本町筋を歩くと天守が見えるとともに、登録文化財の町家や、若者に人気のスイーツのお店などが軒を連ね、多くの観光客で賑わっています。

異例の望楼

針綱神社の鳥居をくぐり、大手道を登った先の本丸にたどり着くと、橙色がかったチャート石で積まれた天守台石垣の上に、三層の屋根で構成された天守が鎮座しています。

つぶさに見てみると、大きな入母屋屋根の上に望楼がのっていることがわかるでしょう。これは望楼型天守といい、名古屋城のような層塔型天守より古い形式のものです。

望楼には廻縁が巡り、大きな扉の両脇には花頭窓があしらわれています。またその下の唐破風が外観に豊かな表情を与え、手前に突き出た附櫓がわずかに外に開くことでおおらかさも感じられる、とても美しいたたずまいとなっています。

特筆すべきは望楼の廻縁で、幅90cmの回廊は外に出ることができ、そこからは江戸時代と変わらぬ素晴らしい眺望を体感することができます。これは、かつて城主だった成瀬家の人々が今も天守を維持管理し続け、行政と力を合わせて運営されているからで、他にはない大きな特徴です。

最新の研究とお城ブーム

実は犬山城天守は、長い間、入母屋屋根の部



軸組模型。天守の構造がよくわかる

分が先につくられ、望楼はその後に増築されたと考えられてきました。ところが最近の調査で、ほぼ同時期に伐採した部材が使用されていることがわかり、一度に全体をつくった後で唐破風や廻縁を含む改築が行われたとする説が有力となり、定説が覆されました。

国宝犬山城天守は、観光資源としてのまちのシンボルというだけでなく、新しい研究が進められる文化財のシンボルとしても、ますますその価値を高めています。

最後に隠れた見どころをご紹介します。それは天守2階にある精巧な軸組模型です。昭和の大修理の折に製作されたもので、天守の複雑な構造がよくわかる、お城マニアにとってたまには垂涎ものの宝です。

重要文化財 名古屋市庁舎と愛知県庁舎

名城エリアに並ぶ、城郭風デザインの庁舎建築



名古屋市の正面外観。タイルを使用した表現主義的な建物に和風の屋根の塔屋が伸びる



愛知県庁舎の北側外観。名古屋城天守を模した帝冠様式のデザイン

それら帝冠様式の庁舎が二つ並ぶ姿は他になく、時代や場所などの歴史的背景を感じさせる、貴重な景観となっています。

名古屋市の庁舎

名古屋市の庁舎の特徴的な外観はコンベで募集されたもので、重層する屋根の塔屋がのった案が採用されました。塔屋の頂上には四方をにらむシャチホコが置かれ、銅板ぶきの屋根根とあわせて、名古屋城の天守を思わせるデザイン

となっています。

一方、館内も見どころが満載です。玄関ホールには、大理石がふんだんに用いられた立派な階段が待ち構え、手すりには陶製の灯籠が緑色の光をたたえています。

階段を上って中央廊下を進むと議場があり、その壁面には美しいタイルの装飾があります。この場所ではかつて、市議会議員たちの社交の場でもあったそうです。

他にも、浅葱色の美しいタイルが貼られた貴賓室付属の化粧室や、5階まで吹き抜ける階段なども見応えがあります。

愛知県庁舎

もう一方の愛知県庁舎は、入母屋屋根に千鳥破風のついた塔屋が三方にあり、より名古屋城の天守を感じさせる外観となっています。緑青色の屋根が、オレンジ色のタイルの建物にのる姿は、ひときわ華やかに感じられます。これらタイルの使用は、陶磁器産業で栄えた愛知県を表すデザインでもありました。

館内に入ると、意外とすっきりした玄関ホールに驚くかもしれません。愛知県庁舎は機能性に重きを置いていて、隣接する名古屋市の庁舎と比べると、その違いは顕著で



貴賓室に付随する化粧室。浅葱色の美術タイルが美しい

2棟の帝冠様式の庁舎

名古屋城エリアには、悠然とたたずむ立派な庁舎が2棟たっています。一つは名古屋市の庁舎、もう一つが愛知県庁舎で、どちらも昭和初期に建てられた鉄骨鉄筋コンクリート造の大きな建築です。

両者に共通しているのが、屋根に和風のデザインが取り入れられていることです。これは、設計に際して和風を意識することが求められたためで、このようなデザインを「帝冠様式」と呼ぶことがあります。



中庭を見る。迫力のあるダイナミックな空間

す。その分、シンプルさがダイナミックな空間を生み出し、中庭側の眺めはとも迫力があります。

また内部空間については、2階の議場が見事で、正面演壇のアーチと和風の円柱、また折り上げ格天井の上の大きなトップライトなど、スケールの大きな設えとなっています。

名古屋市の庁舎と愛知県庁舎は、ともに1998年に登録文化財となり、2014年には重要文化財に指定されました。それを推し進めたのは、市と県による合同のプロジェクトチームでした。

立派な庁舎が並ぶ風景は、そこで働く人々によって守られ、今も大切に使用されています。



photo: Hisao Takeuchi / Hitoshi Kumamoto

城郭を思わせる外観。手入れされた庭に緑色の釉薬による屋根瓦が美しい。車寄せ脇には文官石像が立つ

徳川美術館本館

尾張徳川家のコレクションを収蔵する帝冠様式の美術館



瓦と同じ焼き物でできたシャチホコ

歴史と由緒ある私立美術館

名古屋城から東へのびる「文化のみち」エリアには、名古屋市庁舎や愛知県庁舎、名古屋市政資料館などの近代建築が残り、その終点には日本文化の至宝とも呼べるコレクションを収蔵する徳川美術館があります。

美術館のある徳川園一帯は、かつては尾張徳川家の名古屋本邸で、戦前まで江戸初期の遺構や明治中期に建設された大書院などが残されていました。その敷地の一角に建てられたのが徳川美術館本館で、邸内の建物との調和が図られた結果、「和洋折衷の「帝冠様式」が採用されました。

本館のたたずまい

現在、美術館へは新館正面に至る黒門からアプローチするため、本館が人目に触れるこ

とは少なくなりました。ただ、敷地南側に回ると、緑釉の瓦をのせた塀の先の門扉ごしに、城郭風の本館を見ることが出来ます。

白い外壁の上には高窓があり、以前は電動回転式のルーバーとなっていて、館内の光を調整する役割を果たしていました。屋根には塀と同じ瓦が葺かれ、屋根面が広いいため、いっそう色合いの美しさが目をひきます。また棟の両端には瓦と同素材でつくられたシャチホコものつています。



展示室の格天井。球状の照明器が釣られている

この城郭のような外観は、どこか中国的な風情も感じられます。それは、尾張徳川家藩祖の義直が傾倒した儒教的な中国趣味が意識されたと考えられ、他の帝冠様式の建物にはない艶やかさが漂っています。

車寄せから中へ入ると、玄関ホールには壁と床に象嵌細工が施され、美しい空間となっています。普段、この入口は閉じられていますが、特別展の開催時には内側から見学することが出来ます。

展示空間についても少し触れましょう。広々とした空間には格天井に支輪が巡り、装飾豊かな照明器が4基釣られています。また展示ケースは長押しが高低差をつけてリズムカルに配置され、和風の設えが近代風にアレンジされています。

帝冠様式に至る背景

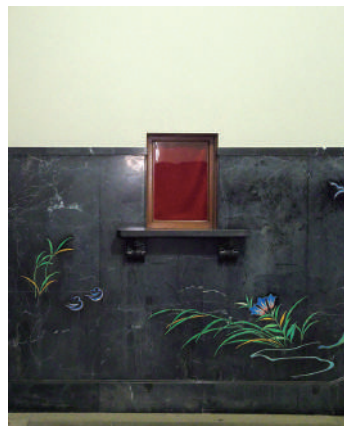
徳川美術館の構想は十九代徳川義親によって進められました。文化的・歴史的価値の高い美術品が散逸することなく保存されたのは、この時の英断によるものです。

義親は、東京国立博物館を帝冠様式で設計した渡辺仁と同級生で、徳川美術館設計コンペの際には渡辺を審査員として招いてい

ます。実施設計はコンペ案をもとに懇意の建築家吉本與志雄があたり、その際に渡辺の意見も求められたと考えられます。

政治的ニュアンスで語られがちな帝冠様式ですが、背景を読み解くと尾張徳川家の美術館としてふさわしいデザインだったことが分かります。

よく手入れされた前庭から外観を眺めた時、けれん味のない姿に静かな感動を覚えます。世界的なコレクションを収蔵するのに相応しい美術館です。



本館玄関ホール壁面の色タイルによる象嵌装飾

1935年（昭和10年）
鉄骨鉄筋コンクリート造平屋建て地下一階
〔原案〕佐野平一、〔実施設計〕吉本與志雄
名古屋市中区徳川町1017

昭和塾堂

城山八幡にそびえる、巨大な和風建築



photo:Hitoshi Kumamoto/Akihiko Mizuno

昭和塾堂の鳥瞰。平面計画・立面ともに「人型」であることが分かる。

特異点としての背景

昭和塾堂の特異性は、時代的背景とも深く関わっています。この建物は元々、青年団の教育施設として建設されました。青年団とは、ムラに存在した若者の教育機関を前身に持つ組織で、明治後期ごろに全国で創立されました。

一方で、青年団は八紘（はつしゅう）一宇の気分とも同調し、訓令には陸軍の意図が強く反映されたといえます。そして大正14年には全国組織が結成され、その発団式は名古屋で開催されました。それが起因となり、昭和塾堂の建設は愛知県が担当し、全国的に見ても異例の規模の建物が出来上がったと考えられます。

謎めいたデザイン

この建物を設計した愛知県宮内課のメンバーは、昭和塾堂の設計にあたり、奈良や京都の社寺仏閣や教会堂などを見学に行ったと伝わっています。

外観を詳細に見ると、塔頂部の装飾は五重塔上部の相輪（さうりん）のようでもあり、また建屋の棟の先には鴟尾（しび）のり、軒の先端が反っていることなど、仏教建築的な意匠が散見できます。

ただ一方で、軒下の垂木（たるぎ）が壁面の柱型と整合が取れておらず、平面計画と外観のデザインの調整に苦労したようすも伺えます。

昭和塾堂の設計に関しては、名古屋市中区や愛知県庁舎と同様に顧問に佐野利器（としかた）が参加しており、帝冠様式につながる意向が働いたことも考えられます。

予期せぬ美しさ

昭和塾堂には、型にはまらない建物らしい、とっておきの場所があります。

一つは塔屋頂部の静坐室（しやうざしつ）（神殿）です。ここは、上部のアーチ窓がキリスト教の教会堂のドームにのる明り取りのような効果になり、驚くほど明るい空間となっています。まるで仏教と神道とキリスト教が融合したような、とて

知られざる名建築

名古屋には、いまだ文化財の指定も登録もされていない凄（すご）い建築が残っています。その代表格が昭和塾堂です。

かつて織田信長の弟信行の末森城があった、城山八幡宮の境内に、丘陵からはみ出さんばかりの大きな鉄筋コンクリート造の建物がそびえています。

外観は八角塔を中心に建屋が人型に広がっているため、全体像が把握しづらく、また寺院建築風の意匠が施された姿とあわせて、圧倒されるような迫力を感じます。



相輪風の装飾がのる八角塔



荘厳な雰囲気のある洗面所

も神秘的な場所です。

もう一つは地階の風呂や洗面所に通じる廊下です。ここは床にだけカラフルなタイルが乱張り（らんちやう）されていて、半地下の静謐（せいひつ）な光と合わせて、言葉にできない美しい空間となっています。

現在、昭和塾堂

は、保存について岐路に立たされています。ただこの謎めいた建物が、忘却された建物、忘れられた建物、つたある時代の唯一無二の建築であることは、もっと知られていいと思います。



乱張りされたタイル